

大学生の歌唱における「音痴」意識

— 2000年と2013年の比較を中心として —

* 小 畑 千 尋

Inferiority Complex toward Singing in Japanese University Students:
Comparative Analysis of Questionnaire Results on *Onchi* Consciousness in 2000 and 2013

OBATA Chihiro

要 旨

本研究の目的は、小学校教員養成課程に在籍する大学生258名を対象として2013年に行った「音痴」意識を中心とした質問紙調査の結果を、2000年調査結果と比較し、大学生の「音痴」意識の変化を明らかにすることである。さらに、新たに加えた歌唱や音楽活動全般にかかわる質問結果について、「音痴」意識との関連を明らかにすることである。分析の結果、2000年と2013年では、「音痴」意識を持つ学生の割合、「音痴」意識と他者からの評価との関連において変化がなく、「音痴」意識を持ち始めた時期も、2000年と同様に「小学校」「中学校」の頃が多いことが明らかとなった。また、本人の「音痴」意識が、歌唱に対する意識や歌唱行動にも影響を及ぼす可能性が示された。

Key words : 「音痴」意識、歌唱、大学生、小学校教員養成課程、自己肯定感

1 はじめに

歌いたいと欲していながら、自分自身の「音痴」意識が弊害となり、歌うことだけでなく、歌うことを介しての他者とのコミュニケーションにおいて支障をきたしている人は少なくない。

現在広く一般に広まっている「音痴」という語は、大正時代に生まれた単なる俗語が語源であるとされる(金田一 1942)。あくまで俗語に過ぎないのであるが、日本では、多くの人が歌唱において、「高いピッチが合わせられない」「音程が合っているかどうかで自分ではわからない」などの具体的な状態ではなく、「音痴」という語で総括して認識する傾向にある。

このことは、筆者が過去に実施した質問紙調査の結果からも明らかである。2000年に国立A大学の小学校教員養成課程に在籍する大学生308名を対象に行った質問紙調査では、自分自身を「音痴」だと思っているかどうかを問うた質問において、「非常に『音痴』だと

思う」「少々『音痴』だと思う」を合わせて46%という結果であり(小畑 2002)、将来小学校教員になる大学生たちの中で、半数近くの学生が「音痴」意識を持っていることが明らかとなった。

しかしその後10年以上経過し、現在の大学生の歌唱技能が向上していると筆者は感じる。たとえば、筆者が担当する「音楽科教材研究法」(小学校教員養成課程の学生の必修授業)のグループによる歌のパフォーマンスでは、毎年多様なジャンルから4、5声部で構成される曲を選ぶグループが多い。その際、J ポップの複雑な旋律に「ハモ」って歌う曲を、音程、リズムなどが正しいだけでなく、豊かな表現力で演奏する学生たちが年々増えているのである。

このような状況にある中で、2000年に実施した「音痴」意識に関する質問紙調査から13年を経て、大学生の「音痴」意識に変化はあるのであろうか。

そこで本研究の目的は、2000年の調査(以下、「2000年調査」と略記)と同様に、小学校教員養成課程に在

* 音楽教育講座

籍する大学生を対象に、「音痴」意識を中心とした内容の質問紙調査を行い、2000年調査結果との比較から、大学生の「音痴」意識の変化を明らかにすることである。さらに、新たに歌唱や音楽活動全般にかかわる質問項目も加え、「音痴」意識との関連を明らかにする。

2 方法

2.1 調査対象者・手続き

2013年4月と10月に、国立大学法人B大学小学校教員養成課程に在籍する大学2年生262名（男子104名、女子158名）を対象に無記名の質問紙調査を実施した。調査は、小学校教員養成課程における必修授業「音楽科教材研究法」（半期）の1回目の講義終了後に行い、成績とは一切関係しないことを調査実施前に伝えた。本稿では、記入不備のあった4名を除く258名（男子100名、女子158名）を分析対象とする。なお、本調査は筆者の所属機関の研究倫理委員会の承認を得て行った。

2.2 調査内容

質問項目は、2000年調査と同じく本人の「音痴」意識にかかわる質問に加え、歌うこと全般に関する意識や経験についての質問、音楽活動全般に関する質問で構成される。具体的な質問項目は資料1に示した¹。

3 結果

3.1 2000年と2013年の「音痴」意識に関する比較

1) 学生自身の「音痴」意識

質問1「自分自身を『音痴』だと思いますか？」の結果を、2000年調査の結果と共に図1に示す。

今回の調査（以下、「2013年調査」と略記）では、「自分自身を『音痴』だと思いますか？」の質問に対して、「非常に『音痴』」に7.8%、「少々『音痴』」に37.2%、合計45%が自分自身を「音痴」と回答した。2013年調査と2000年調査の結果について、カイ二乗検定で比較した結果、5%以下の有意差は認められず（ $\chi^2=2.94$, $df=3$, $p>.05$ ）、「音痴」意識を持つ学生の割合に大きな

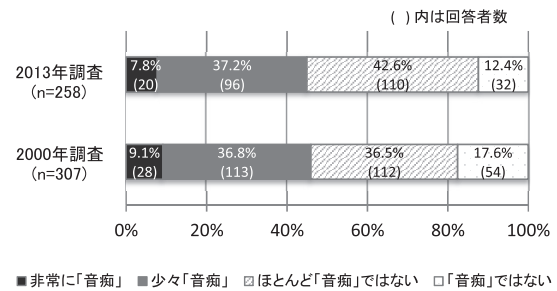


図1 質問：自分自身を「音痴」だと思いますか？

違いは認められなかった。なお、2013年調査の結果について、性別による割合の差はみられなかった（ $\chi^2=3.26$, $df=3$, $p>.05$ ）。

2) 自身の「音痴」意識と「音痴」意識を持ち始めた時期との関連

質問2「いつ頃から自分自身を『音痴』だと思えるようになりましたか？」は、質問1「自分自身を『音痴』だと思いますか？」で「非常に『音痴』」もしくは「少々『音痴』」に回答した学生を対象に、自分自身を「音痴」と意識し始めた時期について問うた質問である。結果を、2000年調査の結果と共に表1に示す。

2013年調査の結果を、自分自身のことを「非常に『音痴』」だと思っている学生と「少々『音痴』」だと思っている学生それぞれについて傾向をみると、「非常に『音痴』」だと思っている学生が、「音痴」と意識し始めた時期として最も多いのが、「小学校」の頃、そして次に「中学校」の頃という順になった。2000年調査と2013年調査の「小学校」「中学校」それぞれの割合をカイ二乗検定で比較した結果、5%以下の有意差は認められず、回答した割合に大きな違いは認められなかった（ $\chi^2=1.96$, $df=1$, $p>.05$ ）。

一方、「少々『音痴』」だと思っている学生が、「音痴」と意識し始めた時期については、5割の学生が「中学校」の頃と回答しており、次に「高等学校」の頃、「小学校」の頃と続いた。2000年調査と2013年調査の「小学校」「中学校」「高等学校」それぞれの割合をカイ二乗検定で比較した結果、1%以下の有意差が認められた（ $\chi^2=9.32$, $df=2$, $p<.01$ ）。

1 実際の質問順は異なる。なお、質問5から質問13については、今後、小学校における歌唱調査（Obata 2012）、中学校における歌唱調査（Obata 2017）と比較検討するため、発問の文言を同じにした。

表1 「音痴」意識と意識を持ち始めた時期との関連

自分自身を 「音痴」だと思 うか？ 「音痴」だと 意識し始めた 時期	非常に「音痴」 だと思う		少々「音痴」 だと思う		合 計	
幼稚園	1	3.8%	0	0%	1	0.7%
小学校	16	61.5%	26	23.4%	42	30.7%
中学校	6	23.1%	44	39.6%	50	36.5%
高等学校	2	7.7%	31	27.9%	33	24.1%
大学	1	3.8%	10	9.0%	11	8.0%
合 計	26 名	100%	111 名	100%	137 名	100%

2000年調査 (n =137)

自分自身を 「音痴」だと思 うか？ 「音痴」だと 意識し始めた 時期	非常に「音痴」 だと思う		少々「音痴」 だと思う		合 計	
保育園・幼稚園	0	0%	4	4.2%	4	3.4%
小学校	10	50.0%	16	16.7%	26	22.4%
中学校	6	30.0%	50	52.1%	56	48.3%
高等学校	4	20.0%	19	19.8%	23	19.8%
大学	0	0.0%	7	7.3%	7	6.0%
合 計	20 名	100%	96 名	100%	116 名	100%

2013年調査 (n =116)

3) 他者から「音痴」だと言われた経験の有無

質問3「他人に「音痴」だと言われたことがありますか？」の結果を、2000年調査の結果と共に図2に示す。

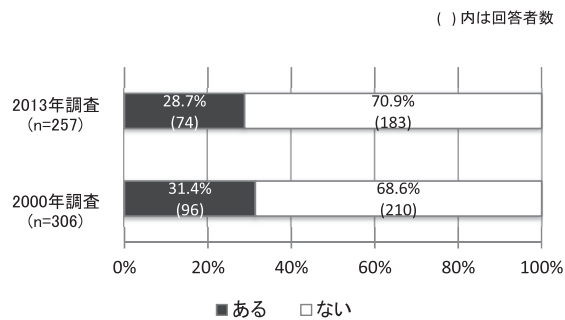


図2 質問:他人に「音痴」だと言われたことがありますか？

2013年調査では、「他人に「音痴」だと言われたことがありますか？」という質問に対して、「ある」に28.7%、「ない」に70.9%が回答した。2000年調査と2013年調査の割合についてカイ二乗検定で比較した結果、二つの群に5%以下の有意差は認められなかった ($\chi^2=0.44$, $df=1$, $p>.05$)。

また、質問3「他人に『音痴』だと言われたことがありますか？」と質問1「自分自身を『音痴』だと思いませんか？」との間の相関係数は.54 ($p<.001$)で、2000年調査における両質問への回答の相関 ($r=.42$, $p<.0001$) とほぼ同じであった。つまり、やや高い相関があった。

質問4では、質問3で他者から「音痴」だと言われたことがあると回答した学生に、誰から言われたことがあるかを問うた。結果を、2000年調査の結果と共に

図3に示す。

2013年調査では、他者から「音痴」だと言われた経験のある学生74名中、多く選択された順に「親」が59.5%、「兄弟姉妹」が48.6%、「クラスメート」が27.0%と続いた。少数ではあるが、学校の先生、ピアノなどの習い事の先生と回答した学生もいた。

2000年調査で他者から「音痴」だと言われた経験のある96名の学生についても、一番多い回答が「親」の51.0%、「兄弟姉妹」が45.8%、「クラスメート」が32.3%と続いた。2013年調査と同様に、学校の先生、ピアノなどの習い事の先生と回答した学生は少数であった。

2000年調査と2013年調査の「親」「兄弟姉妹」「クラスメート」それぞれの割合をカイ二乗検定で比較した結果、5%以下の有意差は認められず、回答した割合に大きな違いは認められなかった ($\chi^2=1.63$, $df=2$, $p>.05$)。

3.2 「音痴」意識と歌唱に対する意識との関連

1) 質問5～13の集計結果

質問5から質問13までの集計結果を表2に示す。

学生自身が歌うことが楽しいかどうかを問うた質問5「あなたは歌うことが楽しいですか？」では、「とても楽しい」に49.6%、「まあまあ楽しい」に42.2%の学生が回答しており、合わせて9割以上の学生が「楽しい」を選択した。同様に、友だちと歌うことに関する質問6「友だちと歌うのは好きですか？」でも、「とても好き」が53.5%と最も多く、「とても好き」と「ちょっと好き」を合わせて9割近くの学生が、友人と歌うことが好きだと回答した。

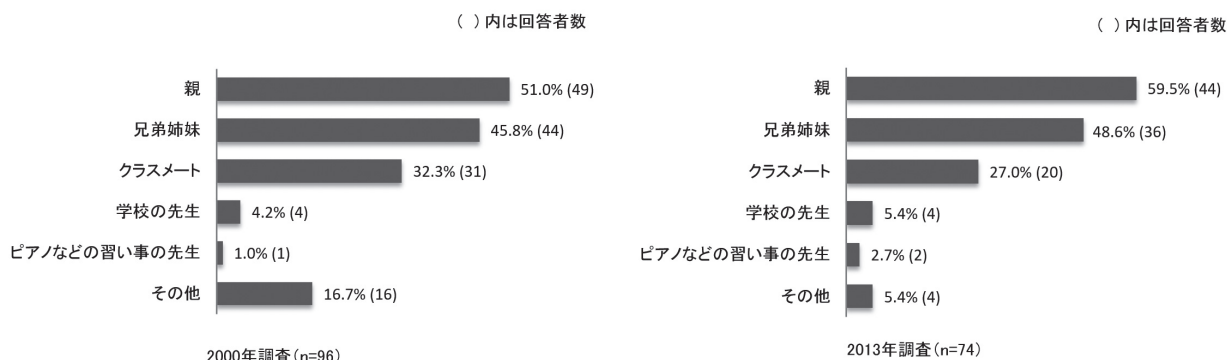


図3 質問:誰から「音痴」だと言われたことがありますか？

表2 質問5～質問13の結果 (n=258)

質問5: あなたは歌うことが楽しいですか？			
とても楽しい	まあまあ楽しい	あまり楽しくない	楽しくない
49.6% (128)	42.2% (109)	6.2% (16)	1.9% (5)
質問6: 友だちと歌うことは好きですか？			
とても好き	ちょっと好き	あまり好きではない	好きではない
53.5% (138)	34.9% (90)	9.7% (25)	1.9% (5)
質問7: みんなの前で、ひとりで歌うのは好きですか？			
とても好き	ちょっと好き	あまり好きではない	好きではない
4.3% (11)	24.4% (63)	40.3% (104)	31.0% (80)
質問8: あなたは歌うのが上手だと思いますか？			
とても上手	ちょっと上手	あまり上手ではない	上手ではない
1.9% (5)	24.9% (64)	52.1% (134)	21.0% (54)
質問9: 歌っていて、自分の声が合っているかどうか、わからなくなることがありますか？			
たくさんある	時々ある	ほとんどない	全くない
17.1% (44)	55.4% (143)	22.1% (57)	5.4% (14)
質問10: あなたが歌って、「上手だね」と褒められたことがありますか？			
たくさんある	時々ある	ほとんどない	全くない
6.2% (16)	54.1% (139)	32.3% (83)	7.4% (19)
質問11: ひとりでいる時に、思わず歌ってしまうことがありますか？			
たくさんある	時々ある	ほとんどない	全くない
53.1% (137)	39.9% (103)	6.2% (16)	0.8% (2)
質問12: 音楽を聴くのは好きですか？			
とても好き	ちょっと好き	あまり好きではない	好きではない
83.7% (216)	14.3% (37)	1.2% (3)	0.8% (2)
質問13: 楽器を演奏するのが好きですか？			
とても好き	ちょっと好き	あまり好きではない	好きではない
34.1% (88)	37.6% (97)	21.7% (56)	6.6% (17)

質問7「みんなの前で、ひとりで歌うのは好きですか？」は、筆者が過去に実施した成人を対象とした「音痴」克服の指導事例で、子ども時代を振り返った際に、「学校の音楽の授業などで、みんなの前でひとりで歌うのが嫌だった」等のエピソードが多くきかれることから加えた項目である(小畑 2007)。結果は、「あまり好きででない」が40.3%と最も多く、「あまり好きではない」と「好きではない」を合わせると、7割の学生が大勢の前でひとりで歌うことが「好きでない」と回答した。

自分自身の歌唱力についての評価を問うた質問8「あなたは歌うのが上手だと思いますか？」では、「あまり上手ではない」が52.1%と最も多く、自分自身の歌が「上手」だと評価している学生は、「とても上手」と「ちょっと上手」を合わせても3割近くしかいなかった。

質問9「歌っていて、自分の声が合っているかどうか、わからなくなることがありますか？」は自分で歌いながら、音高・音程が合っているかどうかを認知できているかどうかの「内的フィードバック」²を問う質問である。「時々ある」が55.4%と最も多く、「たくさんある」と「時々ある」を合わせて、7割以上の学生が、歌いながら自分の声が合っているかどうかがわからなくなると回答した。

他者からの評価を問う質問10「あなたが歌って、『上手だね』と褒められたことがありますか？」では、「時々ある」が54.1%と最も多く、「たくさんある」と「時々ある」を合わせた6割が、「上手だね」と褒められた経験があると回答した。

2 「内的フィードバック」については、小畑 (2007) を参照されたい。

質問11「ひとりでいる時に、思わず歌ってしまうことがありますか？」は、強い「音痴」コンプレックスにより、鼻歌を歌うことさえも躊躇してしまう事例があることから(小畑 2007)、調査項目に加えた。その結果、「たくさんある」が53.1%と最も多く、「たくさんある」と「時々ある」を合わせると、9割以上の学生が「ある」と回答した。

歌唱以外の活動に関して尋ねた項目、質問12「音楽を聴くのは好きですか？」では、「とても好き」だけでも83.7%が回答しており、「とても好き」と「ちょっと好き」を合計すると、学生の98%が音楽を聴くことが好きであると回答した。質問13「楽器を演奏するのが好きですか？」では、「とても好き」「ちょっと好き」を合計すると、7割の学生が楽器を演奏するのが好きだと回答した。

2) 「音痴」意識と質問5～質問13との相関

続いて、質問5～質問13の結果について、4件法のSD尺度(資料1)で得られたデータを得点化したものと、本人の「音痴」意識(質問1「自分自身を『音痴』だと思いますか?」の結果)との関連をみた。結果を、相関の高い順に表3に示す。

質問5～質問13の9項目中、自分自身の「音痴」意識(質問1「自分自身を『音痴』だと思いますか?」の結果)との相関が最も高かったのは、質問8「あなたは歌うのが上手だと思いますか?」であり、やや高い負の相関がみられた($r=-.585$, $p<.001$)。

また、自分自身の「音痴」意識と質問9「歌っていて、自分の声が合っているかどうか、わからなくなることがありますか?」との間にやや高い正の相関がみられた($r=.547$, $p<.001$)、質問10「あなたが歌って『上手だね』と褒められたことがありますか?」($r=\.492$, $p<.001$)、質問7「みんなの前でひとりで歌うのは好きですか?」($r=\.448$, $p<.001$)との間にも、やや高い負の相関が認められた。

自分自身の「音痴」意識と質問5「あなたは歌うことが楽しいですか?」との間($r=\.392$, $p<.001$)、質問6「友だちと歌うことは好きですか?」との間($r=\.375$, $p<.001$)、質問11「ひとりでいる時に思わず歌ってしまうことがありますか?」との間($r=\.225$, $p<.001$)にも、低い負の相関がみられた。

一方、自分自身の「音痴」意識と質問13「楽器を演

表3 「音痴」意識と質問5～質問13の結果との関連

質 問 項 目	相関係数
質問 8 : あなたは歌うのが上手だと思いますか?	-.585
質問 9 : 歌っていて、自分の声が合っているかどうか、わからなくなることがありますか?	.547
質問 10 : あなたが歌って、「上手だね」と褒められたことがありますか?	-.492
質問 7 : みんなの前で、ひとりで歌うのは好きですか?	-.448
質問 5 : あなたは歌うことが楽しいですか?	-.392
質問 6 : 友だちと歌うことは好きですか?	-.375
質問 11 : ひとりでいる時に、思わず歌ってしまうことがありますか?	-.225
質問 13 : 楽器を演奏するのが好きですか?	-.177
質問 12 : 音楽を聴くのは好きですか?	-.146

奏するのは好きですか?」との間($r=\.177$, $p<.01$)、質問12「音楽を聴くのは好きですか?」との間($r=\.146$, $p<.05$)には、ほとんど相関がみられなかった。

4 考察

4.1 大学生自身の「音痴」意識

2013年調査では、「非常に『音痴』」と「少々『音痴』」を合わせると45%の学生が自分自身を「音痴」だと思っている結果となった。この結果と2000年調査との結果の間には大きな違いがみられなかった。

2000年と2013年に限定された結果の比較ではあるが、調査対象とした2000年調査のA大学と2013年調査のB大学の学生は、共に国立大学の小学校教員養成課程の学生である。この10年間に社会は変化しており、人々の意識も変化していると考えられるが、小学校教員養成課程における自身の「音痴」意識には違いがないことが明らかとなった。

13年前と比較し、「音痴」意識を持つ学生の割合が変わらなかった要因として、学生の自己肯定感の低さが挙げられる。

たとえば、質問「あなたが歌って『上手だね』と褒められたことがありますか?」では、「たくさんある」と「時々ある」を合わせた6割が、「上手だね」と褒め

られた経験があると回答している。それにもかかわらず、質問「あなたは歌うのが上手だと思いますか?」の項目においては、自分自身の歌が「上手」だと評価している学生は、「とても上手」と「ちょっと上手」を合わせても3割未満であり、ここからも、学生の自己評価の厳しさがうかがえる。

諸外国と比べても、日本の若者の自己肯定感の低さが指摘されている。たとえば、日本青少年研究所が日本の高校生を対象とした調査では、「私は他の人々に劣らず価値のある人間である」という項目において、「よくあてはまる」「まああてはまる」を合わせた割合は、2002年が37.6%、2011年も39.7%であり、米国、中国、韓国の値と比較して、約半数である（日本青少年研究所 2014）。また内閣府が2013年に若者（満13歳から満29歳）を対象として行った調査でも（内閣府 2014）、「自分への満足感（私は、自分自身に満足している）」について、同時に調査した諸外国よりも有意に低い値となっている（加藤 2014）。

さらに、日本の高校生を対象とした調査での「自分はダメな人間だと思うことがある」という項目においては、「よくあてはまる」「まああてはまる」を合わせた割合が、1980年の58.5%から、2011年の83.7%に増加している（日本青少年研究所 2014）。このように自己嫌悪感を持つ若者の割合が高くなることに伴い、自己肯定感も低下していると思われる。

「音痴」と意識し始めた時期については、自分自身のことを「非常に『音痴』」だと思っている学生では、「小学校」の頃と回答した学生が最も多く、2000年調査で回答した割合と大きな違いがみられなかった。2000年調査結果と同様に、幼少期に自分自身を「音痴」だと思うと、より強い「音痴」意識として定着する可能性があることが、改めて確認された。特に小学生の頃の歌唱指導において、「音痴」意識を持たせない、音高・音程を合わせるための具体的な指導が重要であるといえる。そのことが、児童が生涯にわたって歌唱と肯定的に関われることにつながるであろう。

一方、自分自身のことを「少々『音痴』」だと思っている学生については、「中学校」が最も多いという結果は2000年調査と同じであったが、「中学校」の頃と回答した学生の割合が増えた。

その背景の一つとして、中学校での合唱、特に合唱コンクールの影響が考えられる。2000年調査での対

象者の中学生時代は1992年～1996年頃、2013年調査での対象者の中学生時代は2005年～2009年頃である。ベネッセ教育総合研究所が、2007年に全国の中学校教員を対象に行った調査では、学校行事として「合唱などのコンクール」を84.6%の中学校が「年に1回実施している」と回答している（ベネッセ教育総合研究所 2008）。中学校での学校行事としての合唱コンクールが、全国的にかなり定着していることがわかる。より詳細な検証が必要であるが、生徒全員が参加することが前提の合唱コンクールは、合唱の楽しさやクラスの結束力を実感できる一方で、自分自身の歌唱を否定的に捉えるきっかけにもなりうることを考える必要がある。

また、2000年調査と同様に、2013年調査でも、過去に他者から「音痴」と言われた経験が現在の「音痴」意識と関係していることが明らかとなった。2000年調査の結果よりも相関値が高くなっていることから、他者からの評価が、自分自身のことを「音痴」だと思うこととより深く関連しているといえよう。

この結果は、学校教育現場で「音痴」という語を教員が子どもに対して使うべき言葉ではない、という裏付けにも一見なりうる。しかし、2013年調査の結果からわかるように、「音痴」を多く用いているのは、教員よりもむしろ、親、兄弟姉妹であり、それは2000年調査でも同じ結果である。これらの結果からは、家庭で、気心の知れた家族から、何気なく「音痴」と言われ、そのまま自分自身を「音痴」だとラベリングすることにつながっている状況が推察できる。

一方で、「音痴」コンプレックスを持つ成人の中には、家庭での記憶よりも、むしろ学校の音楽の授業で、（「音痴」という語の使用の有無にかかわらず）本人の歌唱を否定されたと感じる経験を持つ者が非常に多い（小畑 2007他）。よって、自分自身を「音痴」だと思っていることと、他者から「音痴」と言われた経験との関連は、あくまで要因の一つとして捉える必要がある。

4.2 「音痴」意識と他の質問項目との関連について

学生が自分自身を「音痴」だと思っているのかどうかと、質問「あなたは歌うのが上手だと思いますか？」の回答との間には、やや高い負の相関がみられ、「音痴」意識が強ければ強いほど、歌うことに対する自信がない傾向がみられた。

「音痴」意識を持っているかどうかと質問「あなたが歌って『上手だね』と褒められたことがありますか？」との間に、やや高い負の相関がみられた結果からは、歌って褒められた経験がある人ほど、自分自身を「音痴」だと思っていないことがわかる。過去に他者から「音痴」と言われた経験が、現在の「音痴」意識と関係している結果と同様に、他者からの歌唱に対する評価が、肯定的であったか、否定的であったかが、本人の「音痴」意識において影響を与えている可能性を示唆している。

また、本人の「音痴」意識と、質問「みんなの前で、ひとりで歌うのは好きですか？」との間にも、やや高い負の相関がみられたことから、自分自身のことを「音痴」だと思っていればいるほど、他者の前で歌いたくない傾向があることがわかる。ここでも、「音痴」意識と他者の存在との関連がうかがえた。

低い相関ではあったが、歌うことが楽しいかどうか、友だちと歌うことが好きかどうかについても、自分自身のことを「音痴」と思っているかどうかと関連がみられた。つまり「音痴」意識が強いほど、歌うことが楽しくなく、友人と歌うのが好きではないと感じている傾向にある。このことは、「音痴」意識がその人の歌唱行動にも影響を与える傾向にあることを示している。

さらに、低い相関ではあるが、「ひとりでいる時に、思わず歌ってしまうことがありますか？」との関連からは、自身のことを「音痴」だと思っていると、一人でいる時ですら、歌うことを躊躇している可能性があることが示唆された。

一方で、楽器を演奏すること、音楽を聴くことと、「音痴」意識との関連では、ほとんど相関がみられなかった。よって、自分自身を「音痴」意識だと思っていることは、主に、歌唱に対する意識や歌唱行動に影響を及ぼす可能性があることが明らかとなった。

5 おわりに

2013年に実施した小学校教員養成課程の大学生を対象とした調査と2000年調査結果の比較から、この13年間で、「音痴」意識を持つ学生の割合に変化がないこと、また他者からの評価との関連についても変化がないことが明らかとなった。「音痴」意識を持ち始めた時期についても、2000年と同様に、「小学校」「中学校」の頃から「音痴」意識を持ち始めた学生が多いことが分かった。さらに、自分自身を「音痴」だと思っていることが歌唱に対する意識や歌唱行動にも影響を及ぼす可能性が示唆された。

今後の課題として、以下の3点が挙げられる。

第一に、学校教育での歌唱指導が始まる小学校、合唱コンクールなどの合唱活動が盛んに行われる中学校、そして高等学校と、段階的に調査を行い、どのように子どもたちの「音痴」意識が形成されたかを調べる必要がある。

第二に、本調査は、あくまで本人の意識について調査したものである。今後、実際の歌唱技能との関連性についても調査する必要性がある。

第三に、本研究の結果については、日本人のメンタリティ（たとえば謙遜する行為など）と密接にかかわっていると推察できる。今後海外でも同調査を行い、国際比較研究を行うことにより、この結果が、特に日本のみの特徴なのか、諸外国でも同様にみられる傾向なのかを明らかにすることができると考える。

謝辞

データの統計学的分析に関して、懇切な御教示を賜りました宮城学院女子大学教育学部教育学科教授松浦光和先生に、深く御礼申し上げます。


文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2008) 「第4回学習指導基本調査報告書—小学校・中学校を対象に—」『研究所報』46 ベネッセコーポレーション
- 加藤弘通 (2014) 「自尊感情とその関連要因の比較：日本の青年は自尊感情が低いのか？」『平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』内閣府 pp.119-133.
http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf_index.html (参照2017年9月26日)

- 金田一京介 (1942)『国語研究』八雲書林
- 内閣府 (2014)『平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』
http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf_index.html (参照2017年 9 月26日)
- 日本青少年研究所編 (2014)『国際比較からみた日本の高校生 80年代からの変遷』一ツ橋文芸教育振興会
- 小畑千尋 (2002)「『音痴』意識の実態—専門学校生・大学生を対象とした意識調査—」『音楽教育学研究論集』第4号
東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科芸術系教育講座, pp.24-33.
- 小畑千尋 (2007)『「音痴」克服の指導に関する実践的研究』多賀出版
- Obata, C. (2012) “An Investigation of Elementary School Students’ Attitude toward Singing at School—From the Viewpoint of Internal Feedback—,” *The 30th ISME (International Society for Music Education) World Conference Proceedings* (CDROM) .
- Obata, C. (2017) “Inferiority Complex toward Singing in Japanese Junior High School Students: Analysis by Questionnaire Survey for “Onchi” Consciousness,” *The 11th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research Online Proceedings*.
<https://www.apsmer2017.com/online-proceedings> (参照 2017年 9 月26日)

(平成29年 9 月29日受理)

【資料1】「音痴」意識に関する調査項目

- 1 自分自身を「音痴」だと思いますか？
 1. 非常に「音痴」
 2. 少々「音痴」
 3. ほとんど「音痴」ではない
 4. 「音痴」ではない
- 2 いつ頃から自分自身を「音痴」だと思うようになりましたか？
 1. 保育園・幼稚園
 2. 小学校
 3. 中学校
 4. 高等学校（浪人中を含）
 5. 大学
- 3 他人に「音痴」だと言われたことがありますか？
 1. ある
 2. ない
- 4 誰に言われたことがありますか？ あてはまるものすべてに○をつけてください。
 1. 学校の先生から
 2. 親から
 3. 兄弟姉妹から
 4. クラスメートから
 5. ピアノなどの習い事の先生から
 6. そのほかの人から（具体的に： ）
- 5 あなたは歌うことが楽しいですか？
 1. とても楽しい
 2. まあまあ楽しい
 3. あまり楽しくない
 4. 楽しくない
- 6 友だちと歌うことは好きですか？
 1. とても好き
 2. ちょっと好き
 3. あまり好きではない
 4. 好きではない
- 7 みんなの前で、ひとりで歌うのは好きですか？
 1. とても好き
 2. ちょっと好き
 3. あまり好きではない
 4. 好きではない
- 8 あなたは歌うのが上手だと思いますか？
 1. とても上手
 2. ちょっと上手
 3. あまり上手ではない
 4. 上手ではない
- 9 歌っていて、自分の声が合っているかどうか、わからなくなることがありますか？
 1. たくさんある
 2. 時々ある
 3. ほとんどない
 4. 全くない
- 10 あなたが歌って、「上手だね」と褒められたことがありますか？
 1. たくさんある
 2. 時々ある
 3. ほとんどない
 4. 全くない
- 11 ひとりでいる時に、思わず歌ってしまうことがありますか？
 1. たくさんある
 2. 時々ある
 3. ほとんどない
 4. 全くない
- 12 音楽を聴くのは好きですか？
 1. とても好き
 2. ちょっと好き
 3. あまり好きではない
 4. 好きではない
- 13 楽器を演奏するのが好きですか？
 1. とても好き
 2. ちょっと好き
 3. あまり好きではない
 4. 好きではない